

ベル即ちガリバーの旅行日記を書き當時の社會を嘲り飛ばしたる人なり。氏は性質淡泊にして稍輕卒なりしが、又有名の畜家なりき。

スッキフト氏の家に、其友人より數々菓實或は遊獵の獲物など進物として持ち來る一小童ありけり、然れども氏は流石文學者にして淡泊なるが爲に未だ一度も少しの心付けだになしたるをなかりけり。

或る日小童例の通り澤山の進物を入れたる籠を待ち來り、スッキフト氏の門戸を敲けり、氏は自

おむすび と ねだんど か  
けつくらしをしました、いつでも  
ねむすび が まけますから、な  
ぜ、そんなにはやいのですかと  
ねむすび が ききましたら、わ  
たし いつも あづきつけてい  
ますから と ねだんど が も  
— しましたとさ

ら戸を開きて之を迎へたり、小童いと無作法なる顔色にて曰はく「茲に私の主人が進らせし澤山の物がありません」と、ドクトル先生は小童のいかに無作法なる舉動に氣を損じながら、曰はく「入ひれよ小僧よ御前は疑が悪い様に思はれるが凡べて使ひは叮嚀にせねばならぬものだぞ、私が御前に其作法を教へてやるからね……今假りに小僧御前がドクトルスッキフト

で私が使ひであるとせよ」といひながら、ドクトル先生其帽子を脱いで小僧に一揖して曰はく「ド